

松 山 大 学 論 集
第 26 卷 第 2 号 抜 刷
2 0 1 4 年 6 月 発 行

薬学史の時代区分に関する研究(3)

——江戸時代の別府地域（大分県）における
温泉の医療利用に関する時系列的研究——

牧

純

研究ノート

薬学史の時代区分に関する研究(3)

——江戸時代の別府地域（大分県）における

温泉の医療利用に関する時系列的研究——

牧			純 ^{*)}
田	邊	知	孝 ^{**)}
畑		晶	之 ^{***)}
関	谷	洋	志 ^{*)}
坂	上		宏 ^{****)}
難	波	弘	行 ^{*****)}
玉	井	栄	治 ^{*)}
舟	橋	達	也 ^{**)}
山	口		巧 ^{*****)}

要

約

薬学史の時代区分に関する研究の一環として、筆者らは温泉医療の歴史に注目した考究を行っている。今回は、多数の旅行客・湯治客が集まる世界的に有名な別府の温泉（大分県）について、江戸時代における医療利用を中心とした文献検索を実施した。17－19世紀における現在の別府地域における温泉の事

*) 松山大学薬学部生体環境系薬学講座感染症学研究室

**) 松山大学薬学部生体環境系薬学講座衛生化学研究室

***）松山大学薬学部物理系薬学講座薬品物理化学研究室

****）明海大学歯学部病態診断治療学講座薬理学研究室

*****）松山大学薬学部医療薬学科臨床薬学教育研究センター

蹟に関する文献を時系列的に整理し、それらをもとに検討したところ、次のような特色があげられた。

- ① 17世紀末の別府をも襲った大津波と大震災の甚大な被害から1世紀近くが過ぎて、安定した時代（特に元禄時代以降）となると、文人・墨客たちが別府の温泉を訪れており、紀行文も残されている。
- ② 庶民の間でも温泉を楽しむ余裕が認められ、なかには別府に逗留し温泉に入浴する人々もいた。庶民の生活習慣の一部としての温泉入浴に関する記載も残っている。
- ③ 山間部の明礬（みょうばん）地区の「硫黄泉」は、浜脇のような海辺の「食塩泉」とは際立った存在であった。前者は、皮膚病、後者は眼病対策などと経験的な使い分けもなされる時代となった。現代では、その価値に科学的な裏づけがなされている。すなわち、日本薬局方（第16改定）に硫黄の皮膚疾患に対する効果が述べられている。

江戸時代の別府は、庶民の間でも、「経験的な温泉医療」が浸透・定着していった時代であると判断される。このことから、少なくとも温泉の医療利用に関して、別府地域のこの時代は、薬学史の時代区分における「経験医療の時代」であり、近現代の科学の時代への橋渡しになった前段階と解釈される。

Summary

Needless to say, there are many types of spring hot waters utilized all over the world. This study was focused on the hot spring bathings in Beppu in the 17th – 19th century of Oita Prefecture, Japan. Beppu areas was fairly stable during the Era of Edo compared with other eras. In those days common people in Beppu would not only enjoy the hot spring bathings daily, but also make the best of them from the viewpoint of the promotion of health and medical treatment. This fact has been corroborated by a number of articles published in the Era. This communication first compared the hot springs before and after Edo Era in Beppu.

A sound conclusion has been drawn as follows. The hot springs in the Era of Edo in Beppu areas used to be expected to promote the inhabitants' health based on their daily-life experiences, not on mere beliefs in some previous ages or not on scientific evidences presented in Meiji Era and later.

緒 言

井上靖の歴史小説「楼蘭」¹⁾のなかでは、砂漠の暴風により短時日にして埋もれたシルクロードのオアシス国家「楼蘭」ではあるが、松田壽男の学術書『砂漠の文化』²⁾をもとに再考すると、実際には長い年月を経て埋もれたのが事実のようだ。

しかし、歴史の世界では、逆に「事実は小説より奇なり」ということも忘れてはならない。日本の歴史開闢の時以来、小説をはるかに上回るような天変地異がおこったのも事実だ。別府湾（大分県）に、16世紀末（1596年頃）まで浮かんでいた瓜生島（うりゅうじま）等の大きな島々が、地震などの大災害で、海中に没してしまったこともそのひとつであろう³⁾。貝原益軒の『豊国紀行』³⁾に「別府の辺り大地震がおこり、昔（16世紀後半のこと、筆者らの解釈の註）あった別府村悉く海となる。古の別府村は今の町の数町東にあり。其所今は海となりて、其のあともなし。…」とある。

この海没は中央の関が原の戦い（1600）よりも少し前のことで、徳川家康による天下一統も目睫の間に迫っていた。豊後の国（大分県）では、既に勢力を失っていた大友氏が、天下分け目の西軍側に呼応することで失地回復の最後の機会をうかがっていた⁴⁾。しかし、西暦1600年、東軍側の黒田軍との戦いに空しくも敗れ（石垣原合戦、又は、関が原の戦いの直前のことで“九州の関が原の戦い”とも呼ばれる⁴⁾。豊後の地は多くの比較的小さな大名の地に分割された。

温泉で有名な現在の別府市地域は主として江戸幕府の天領として統治されたが、山間部の一部である鶴見村地区（明礬温泉地区も含む）は1601年から明治に至るまで一貫して久留島氏の森藩の領地であった³⁾。17世紀半ばには、い

わゆる“鎖国体制”も確立し、地勢と情勢の安定した新しい時代に入った。

風光明媚にして、世界的な温泉資源を中心とした多種多様の観光資源に富む別府は、近現代、海外からも多くの観光客を引きつけて止まないが、本論文では江戸時代を中心とした現別府市域の温泉の医療利用に注目する。すなわち、上述のように16世紀末の別府湾の大きな島々の海没、17世紀に入り徳川家康の開幕（1603）、キリシタンの厳しい取り締まりを伴う鎖国体制開始の時代を経て、ようやく世の混乱が何とか収まった17世紀中葉の江戸時代から、世相の慌ただしい明治維新前後にかけての19世紀までである。この時期は、温泉に関する数々の文献が残されており、温泉医療に関する薬学史の論考を開始しやすいと考えた。また江戸時代は一般庶民にも温泉入浴の習慣が根づいたとみられている⁵⁾ので、別府における状況も一考の価値ありと判断した。

これらが、別府温泉地域（現在）の事蹟と場所に関する中心的な文献^{3, 6)}をもとに、別府地域の江戸時代における温泉医療に関する薬学史の論考をスタートさせた背景である。

材 料 ・ 方 法

多種多様な文献¹⁻¹³⁾に基づいた考究のみならず、実際に別府地域にも赴いて精査し、必要な撮影も実施した。江戸時代、別府地域の温泉に関係した人物の著作に関してパソコンを用い、インターネット検索も行い、表われた件数にも着目した。件数は日々変動するので、半定量的に傾向を示した（表1）。内容を以下の「結果・考察」に記した。引用文は原文の儘もあるが、ところによっては原義を損なわないように留意したうえで、分かりやすい現代語表現とした。史実や事蹟に関する西暦の年号は『新詳日本史図説』（浜島書店）⁷⁾に従った。その他の資料^{8, 9, 10)}も適宜参照とした。

表 1. インターネット検索における出現程度に関する半定量的表示

著者, 書名, (発表年)	Internet 検索出現件数※
貝原益軒 (1694) 『豊国紀行』	人名, 書名, 鉄輪, 別府で検索したところ++ ; 「別府」の代わりに「鶴見」と入れたところ++
寺島良安編纂 (1712) 『和漢三才図絵』	人名, 書名および「血の池地獄」の検索において++
古川古松軒 (1783) 『西遊雜記』	人名, 書名および鉄輪で+
脇蘭室 (1807) 『函海魚談』	著者名と地獄温泉の検索で++
伊島重枝 (1845) 『鶴見七湯廻記』	人名と書名の検索で+ ; 関係の資料「別府を題材とした文学」については+
賀来飛霞 (1845) 『高千穂採葉記』	この書名と亀川で+
著者不詳 (1851) 『諸国温泉効能鑑』	書名, 浜脇, 別府で検索したところ++. 1817 刊行(Wikipedia)のものも出てきた。さらに年号 1851 を加えたところ+
荒金義八郎 (1862) 『荒金家御用留』	荒金, 1862, 所用留で行った検索で+
著者, 執筆年代不詳 『立石村明細帳』	書名と出湯で検索したところ+
八田 秋 (1963) 『別府温泉史』 「医学から見た別府温泉」	著者名, 温泉, 別府, 医学で検索したところ++

※ + (1 桁) ; ++ (2 桁) ; 今回の表示は, 2008 年研究開始時点での試みであって, 現在では, はるかに多い件数が出てくる傾向にある。今後かなり大きな変遷が予想され, それ自体を今後の研究対象とする計画である。

結 果 ・ 考 察

I. はじめに

大分県社会科会『大分県の歴史散歩』⁴⁾によると, 別府が湯治場として活況を呈するようになったのは江戸時代からで, 本格的な温泉町へ発展するのは明治時代になってからである。本論文では, 江戸時代の別府地域の温泉に関する記録をもう少し具体的にみて, 考察した。この時代は, それ以前の時代, 例えば, 戦国時代のように別府地域の温泉に関する文献資料が乏しい時代とは異なり, ネット検索においても比較的多くの資料が出てきた。

表 1 に示すように, 『豊国紀行』のように著名な書物においては++であり, 多数の件数が出現した。その一方, ローカルな記録では, 当然ながらあまり出

てこなかった。

江戸時代の関連書物をほぼ時系列的にみた。時系列的記載では別府温泉史³⁾と別府市誌 CD 版⁶⁾とが基本となる。それらから引用の著者名(西暦年号)と『書名』を中心とした。

但し、執筆時期や著者不詳のものもある。その際、別府の泉質の分布をも念頭におき、現在の別府市域を大きく、山辺と海辺の地域に注目しながら、論を進めた。すなわち、海から離れた地域ないしは山間部(明礬温泉地区、鉄輪温泉地区、堀田温泉地区、観海寺温泉地区など)と海岸地帯(浜脇温泉地区、亀川温泉地区、現在の別府駅付近の市街地温泉を中心とした別府温泉地区など)に焦点をあてた。

“16世紀末の大地震と大津波などの大災害により、別府湾に浮かんでいた瓜生島などの大きな島が海没し、まもなく徳川家康により天下が統一され、その後鎖国体制に入り、地勢と情勢とが一応安定してきた17世紀中葉の江戸時代から、江戸時代末期にかけての19世紀まで”の様子が次のようにうかがえる。

Ⅱ. 別府地域の諸温泉に関する時系列的レビュー、特に医療利用に関して^{3,6)}

●貝原益軒(1694)『豊国紀行』(ほうこくきこう)：福岡の儒学者・医者であった著者は、約1世紀以前の豊後(大分県)における出来事の取材目的で豊後入りしている。別府市の海辺から離れた地域や山間部に関しての記載がある。“鉄輪温泉は熱い温泉で、西には鶴見村(森藩支配、本著者らの註)、当時はまだ噴煙活動をしていた鶴見山がある”との内容の記述である。海辺地域の温泉についても述べられている。“別府は流川に沿って温泉、海中は塩湯、干潮に入浴”。庶民は仕事の疲れを温泉により癒していたことが、当時の資料から十分うかがえる^{3,6)}。別府の町中を流れていた代表的な川、すなわち流川(覆いをかぶせて今は暗渠。現在の流川通り、著者註)に沿った温泉を朝夕里人たちが日常利用している様子は“ごく海辺の湯は干潮時に入浴する人が多くなる”と描

かれている。健康論に自信のある筆者だけあって、それが病気によと記している。

●寺島良安編纂（1712）『和漢三才図絵』（わかんさんさいずえ）：大阪の漢方医であった寺島良安が編纂したこの百科事典の中で、別府市の「血の池地獄」を紹介している。血の池地獄は現在別府の有名な観光名所のひとつであるが、当時、「血の如き赤池」として知られた。

●古川古松軒（1783）『西遊雑記』（さいゆうざっき）：岡山出身の地理学者、古川古松軒による別府山間部の記載で、鶴見岳が当時噴煙をあげていたことがわかる。海辺から離れた温泉地域である鉄輪の湯についての記述では“熱湯の池で野菜をゆでる、硫黄のにおいがつく”が注目される。別府の湯については、“宿々の水は硫黄の臭気あり、飯にも汁にも硫黄の臭いが移って甚だ困る”とある。

●脇蘭室（1807）『函海魚談』（かんかいぎょだん）：帆足萬里の師であるこの著者は、海浜地域の湯、亀川の湯を記載。海辺から離れた鉄輪の湯については、一遍上人が開いたと伝えられる石風呂の蒸し湯が疼痛に効果のあることを記している³⁾。“1795年、地獄温泉地区訪問の際、里人が熱湯の温泉の噴気を利用して、「野菜を煮、芋を蒸している」のを珍しがっている”は興味深い³⁾。これは寄生虫感染防御に役立っていると本論文の著者牧らは判断する。

●伊島重枝（1845）『鶴見七湯廻記』（つるみしちとうのき）：鶴見地区には皮膚病治療のため遠近から入湯者が訪れた。1-2週間滞在。鶴見七湯とは明礬、登備の尾（とびのお）の湯、照湯（てるゆ）の湯、宮路（みやじ）の湯、伊麻井（いまい）の湯、壺の湯、谷の湯をいう。森藩士で寺社奉行を勤めた伊島重枝が文章を、図絵は江川吉貞が描いた。大分県歴史博物館所蔵のカラーの図絵

が残っている⁶⁾。

●賀来飛霞（1845）『高千穂採葉記』（たかちほうさいやくぎ）^{3, 6)}：海辺の湯、亀川の湯で、蕩邪泉（とん）と呼ばれたものは日に数十人の入浴客あり、とある。これは検索でわずかながら出てきた。著者名と年号はその検索による。竹田から亀川に移動した時の記録らしい。

●著者不詳（1851）『諸国温泉効能鑑』^{3, 6)}：刊行された1817年と1851年の間は34年もの隔たりがある。著者が明確に記されていないのは定期刊行物のようなもので、かなりの多人数で編集したものではないだろうか。19世紀ともなると別府に次第に温泉街が形成され、庶民にも利用されるようになった。現在の別府市の湯が全国的に知られていたらしく、“浜脇湯は西方前頭三枚目にランクされ、瘡毒（梅毒）によいとある。浜脇は港町で遊郭のあったこと³⁾も関連があるのではないかと思われる。同地域を訪れた広瀬淡窓の漢詩も残っている。別府湯は西方前頭六枚目で、眼病や皮癬（ダニなどによる皮膚病）によいとある。当時から別府の温泉は全国的に知られた存在であった。ちなみに西方、東方の序列の首位である大関にそれぞれ有馬温泉、草津温泉がある（現在と違い、横綱はトップではなく、免許を意味していた）。

●荒金義八郎（1862）『荒金家御用留』^{3, 6)}：豪商で煙草屋を営んでいた著者が御用留に別府市流川下流一帯の見取り図を掲載している。まだ民家はまばらだったようである。庄屋が領主からの御用を書き留めておくものである御用留¹¹⁾がこの図とメモを残した背景をも調べる必要があるが、現在の流川通りから海門寺あたりの様子が大雑把ながら判る。

●執筆年代、著者不詳『立石村明細帳』^{3, 6)}：出湯（いでゆ）が3箇所あげられている。海辺からは距離のある「堀田湯」は肥前病（疥癬）、かさ（おでき）な

どの皮膚病によいとされた。この湯は硫黄泉である。春秋、別府・浜脇村あたりの入湯客が泊りがけで来ると記載されている。立石村は小倉藩細川氏の領地であった。「観海寺湯」はしゃく、淋病などに効くとされた。春秋、上記同様、別府・浜脇村あたりからの入浴客があったらしい。「鳥の湯」は療養にふさわしい湯ではないが、村人が入湯するとある。

後世に執筆されたものではあるが、論述の流れにおいて、是非次の著作を引用しておきたい。

●八田 秋(1963)『別府温泉史』『医学から見た別府温泉』³⁾：“主として伊予方面から農閑期を利用して来る湯治舟は今の浜脇あたりに停泊，舟中で自炊，海岸近くの温泉，農繁期に向けてレフレッシュ”これは阿岸⁵⁾の見解すなわち“江戸時代ともなると，農民・漁民が農・魚閑期を利用して「湯治」する習慣があった…筆者阿岸の考える現代的温泉療法の原型ともいえるべきものであった”と一致する。但し八田の記述は，時代不詳で，伊予の表記からすると，江戸時代かと思われるが，明治維新後の可能性も否定できない。江戸から明治以降継続していたかもしれない。

Ⅲ. 考究と結語

地勢と情勢の比較的安定した江戸時代における今日の別府市域の温泉に関する文献情報に注目したところ，現段階で次のような特色が認められた（1～4）。現在，科学的に支持されている硫黄の皮膚疾患に対する効果⁵⁾が，既に江戸時代，別府の山間部温泉において，日常生活の中で経験的に支持されていた。すなわち，別府の温泉医療に関して，この時代は「経験から科学への前段階」にあったと考えられる。

(1) 文人・墨客たちの別府への来訪

現在の大部分県外の藩からも文筆家たちが，別府の温泉を訪問している。17

世紀後半以降の江戸時代は、日本全体で状況が概ね好転し、旅行しやすくなったのであろう。江戸では、松尾芭蕉が『奥の細道』の旅に出かけたのも、時代が落ち着いた17世紀後半、すなわち元禄の世(1689)⁷⁾であった。

(2) 庶民の生活習慣としての温泉入浴

庶民の生活習慣の一部としての温泉入浴に関する記載も残っている。仕事の疲れを癒そうと、別府の海岸地域の温泉に入浴していた人々もいたようである。農民、漁民が農・魚閑期を利用して湯治する習慣に関する阿岸説⁵⁾は江戸時代の別府においても言えそうである。

(3) 藩領と天領の間の人々の往来

現在の別府市域の温泉のなかでも、江戸時代、森藩の飛び地だった明礬温泉地区、天領であった別府の温泉地域、および小倉藩の領有地立石村は政治経済的には異なっており、人々の往来には当然制限が加わったであろう。しかし明確な医療目的の温泉利用なら、ある程度の往来があったのではなかろうか。詳細は今後よく調べる必要がある。

(4) 山辺と海辺の温泉の経験的効能の認識¹²⁾

山辺と海辺の地域に関する記載⁶⁾を要約すると、山辺の地域では明礬、鉄輪地区が当時既に有名であり、硫酸塩泉型、強い酸性泉が注目されていた。硫黄泉に特徴があった。浜脇、別府などの海辺の地域では食塩泉型が目立ち、海水浸入の影響を受けた温泉の傾向もみられた。しかし別府市街地地域にも硫黄臭の記載がある。駅近くの別府高等温泉のひとつは硫黄泉である³⁾。海辺の亀川地区の温泉は塩化物と硫酸塩が混ざった泉質を示すことが当時既に記載されている⁹⁾。経験的な使い分けがなされていたのであろう。

(5) 現代の日本薬局方における硫黄の皮膚疾患に対する効果に関する記載¹²⁾

第16改正日本薬局方解説書において、硫黄に関する記載がある。硫黄は皮膚表面において徐々に硫化水素やポリチオン酸となる。特に、ペンタチオン酸となると抗菌作用を現し、感染症病原体による皮膚疾患に有効である。さらに、皮膚角化に関与するSH基をS-Sに変えることによって角質軟化作用を示すことから、薬剤の浸透性を増加することも期待される。同解説書¹²⁾には、硫黄を含む2製剤が収載されている。イオウ・サリチル酸・チアントール軟膏(Sulfur, Salicylic Acid and Thianthol Ointment)は、寄生虫性皮膚疾患治療薬として、みずむし、いんきんたむし、ぜにたむし、疥癬(かいせん)に適応があり、OTC薬として販売されている。一方、イオウ・カンフルローション(Sulfur and Camphor Lotion)は、クンメルフェルド(Liq. Kummerfedii)の類似処方であるが、尋常性瘡創、面皰(にきび)、酒皰(この“しゅさ”は、広辞苑第5版(1998)によると、“顔面、特に鼻・頬に対称性に生ずる慢性の炎症で、酒客に多いが飲酒と無関係にも起こる”とある。)に適応があり、医療用医薬品として製造・販売されている。これらの医薬品以外にも、病院内の薬局製剤¹³⁾として硫黄が含まれた外用剤が処方され、各種皮膚疾患に用いられている。

ごく最近でも実際に疥癬感染を治療する目的で、硫黄剤がイベルメクチンとともに使われた症例が報告されている(笠松 悠ら：“AIDSに合併した疥癬の一例”，第25回日本臨床寄生虫学会大会，2014年6月14日於東京医科歯科大学)。

結 わ り に

愛媛県から海路によるアクセスの比較的よい別府は、実は本論文の筆頭著者(牧 純)の郷里である。これが、本研究をスタートさせる契機のひとつとなった。松山市在住の筆者が、愛媛県と大分県をフェリーで往来する際、別府湾海上にあっては、瓜生島海没や江戸時代の人々が温泉入浴のため船で往来した

様子が、しばしば脳裏に浮かぶ。資料の収集はまだ始めたばかりであるが、今後とも継続して渉猟し、系統立て、深めてゆきたい。

現代人から見れば、抑圧感がぬぐえない所謂“鎖国”の時代とはいえ、前後の戦国時代や明治時代と比較して、平和だった江戸時代に、人々が伝統ある別府地区の温泉を享受した様子を、海外にもよく知ってもらいたいと考える。その様子は、決して“日本の国が閉ざされている”との考えに由来するかもしれない圧迫感はない。今後、戦国時代以前や明治維新後、日本の他の地方または海外との交流を考えた国際保健、グローバルヘルスの観点からの比較論を展開できる契機となれば幸いである。

また薬効・薬理学的研究や他の地方との比較論も進行中である。諸賢の貴重な助言、ご批判を賜りつつ、研究推進がはかれることを期しながら、この報の執筆を終える。

謝 辞 本稿を仕上げるにあたって、臨床薬学と基礎薬学の境界領域にて常時ご指導ご鞭撻いただいている松山大学薬学部医療薬学科臨床薬学教育研究センターの出石文男教授、柴田和彦教授、日々情報提供くださっている秋山伸二博士、相良英憲博士はじめ諸先生方に心より御礼申し上げます。

文 献

- 1) 井上靖：『楼蘭』新潮文庫，東京（1968）
- 2) 松田壽男：『砂漠の文化－中央アジアと東西交渉』中公新書121，中央公論社，東京（1974）
- 3) 別府市観光協会編著『別府温泉史』教育図書出版 いずみ書房，東京（1963）
- 4) 大分県高等学校教育研究会地理歴史科・公民科部会・佐藤晃洋，三重野誠編集：『大分県の歴史散歩』山川出版社，東京（2008）
- 5) 阿岸祐幸：『温泉と健康』岩波新書，東京（2009）
- 6) 市史編纂事務局企画：『別府市誌』日新印刷株式会社（別府市）編集・制作（2003）
- 7) 浜島書店『新詳日本史図説』，名古屋（1999）
- 8) 大分県立先哲史料館開館10周年記念『豊の国のモノづくり－江戸時代の特産品－』（2004）

- 9) 『大分県』－新風土記 1955－岩波写真文庫（復刻ワイド版）（1955）
- 10) 大分県立先哲史料館秋季企画展『知っているつもり？ 小藩分立－バラバラだけどつながっている－』（2002）
- 11) 地方史研究協議会編：『近世地方史研究入門』岩波全書，東京（1980）
- 12) 第16改正日本薬局方解説書，廣川書店，東京，C-388，（2011）
- 13) 日本病院薬剤師会監修：病院薬局製剤第6版，薬事日報社，東京，p122, 137, 147, 187-189，（2008）